

うじいえ

編集・発行

うじいえ自然に親しむ会

事務局

さくら市ミュージアム

- 荒井寛方記念館 - 内

自然に親しむ会だより

第11号

平成22年2月20日

活動の輪が広まる！

会長 加藤 啓三

平成21年度は、これまでの本会の活動の輪が広まりつつあることを実感した年でありました。以下、その事柄を書き出してみます。

4月 写真展「鬼怒川の自然」松田喬副会長が撮影した写真が、烏山信用金庫氏家支店で開催された。

6月 読売新聞東京本社と日本野鳥の会栃木県支部より、鬼怒川河川敷でシルビアシジミやカワラノギク等の保全活動が認められ、『第24回栃木県自然保護功労賞』を受賞した。

6月 特定生物のオオキンケイギクの抜き取り活動が、本会の提案により、栃木県自然環境課のホームページに取り上げられた。

9月 桜野の総合運動公園内に、本会が実施していた樹木名札の取り付けをさくら市ロータリークラブが引き継いで実施した。

9月 さくら市立押上小学校6年生が、シナダレスズメガヤの抜き取り作業を体験し、さらに10月には、押上小学校の全先生も抜き取りに参加した。

10月 生活協同組合パルシステム東京の会員が、シナダレスズメガヤ抜き取り作業とカワラノギク観察会に参加し、第1回交流会が開かれた。

12月 環境問題に取り組んでいる東京のNPO法人・地球船クラブが本会の活動に注目し、会報『地球船』10号に『絶滅危惧種が生きている河原を守る輪が、故郷を愛する気持ちとつながって……』という記事を載せた。

平成22年1月 県立博物館において、『とちぎ生きものの環(わ)シンポジウム』～生物多様性の保全に向けて～(栃木県と日本野鳥の会栃木県支部主催)で、副会長・松田喬さんが『鬼怒川れき質河原における動植物の保全活動』の事例発表をした。

このほかに、さくら市の広報、下野新聞、朝日市民ニュース、とちぎテレビ、しもつけの心、などで活動が報じられた。

鬼怒川流域の人と自然にふれて

パルシステム東京共同環境推進室
守屋 由紀枝

パルシステム東京は1都8県の10の生協、110万人の組合員から構成されるパルシステムグループの中核として、食の安全と産直、人権、福祉、平和、環境と様々な社会的課題に取り組んでいます。生物多様性保全においては1990年代から農薬削減プログラムの策定や認証制度の設置等、有機農法を初めとした生き物と共存できる循環型農業を推進しています。2009年度は「モニタリング調査・外来植物の駆除と地域生態系の保護・東京の緑を考える」の3つのテーマを柱に、暮らしの中の生物多様性保全に取り組んでいます。

今回「東大・パルシステム東京協働プロジェクト」によるチョウのモニタリング調査を進めているご縁で鷺谷教授から「うじいえ自然に親しむ会」をご紹介いただき、鬼怒川流域のシナダレスズメガヤ駆除の実験地を見学することができました。バスから降り立った鬼怒川流域は広く、とても人の力では変えられそうにもないと思いましたが、見学を通じて、皆様のすすめる抜き取りや種まき等の地道な努力による継続の力と、学びあい共有していくことの大切さを肌で感じるすることができました。特に、シナダレスズメガヤに覆われた河原と、地域の皆様が力を合わせて蘇らせたカワラノギクの咲く河原の風景の対比が、心に残りました。鬼怒川を愛し、地域に生きる方々の穏やかな情熱が伝わってきて感動いたしました。

またご招待いただいた交流会では、皆様の調査研究の活動報告や東大の研究室の皆様による専門的なお話、意見交流など盛りだくさんで大変勉強になりました。参加した組合員からは「大変面白かった」「勝山鍋がとてもおいしかった」「多くの準備を頂きありがとうございました」「勉強になった」等、多くの感想が寄せられました。

あらためまして、この度は貴重な見学をさせて頂き本当にありがとうございました。皆様のますますのご活躍をお祈りいたします。



2009年10月10日
(ミュージアム民家広場)
パルシステム東京との交流会
で、鬼怒川の生物について、写真で説明する松田喬副会長。

会 員 便 り

さくら市草川 相吉沢 愛忠

加藤啓三会長さんと私がたまたま福祉関係の仕事をしている時、「自然に親しむ会」へ入会をすすめられたのが4年前です。それ以来、奉仕作業で皆さんと一緒に汗を流しながら“自然を守る”という気持ちが私自身に芽生えました。

私の家から徒歩で5分のところに鬼怒川のゆうゆうパーク（河川敷公園）があります。目の前には日光連山、その手前に篠井富屋7連峰の山々、そして鬼怒川と素晴らしい景観にめぐまれています。数年前より環境省の要注外来生物リストに載っているオオキンケイギクが増え続け、今では公園の外の河川域にまで広く見られるようになりました。そのような状況を目のあたりすると河原の生態系保全のための緊急対策が必要と思われます。

また、市内のいたる所でもオオキンケイギクが咲いているのが見受けられます。市役所の方には多くの市民に理解していただけるようなPRをお願いし、市内のボランティアの方々のご協力を賜りながら、私たち会員が力を結集し根絶を目標に頑張りたいと思います。

また去年は、押上地区のボランティアグループ「水神会」の皆様が、ふくらみ塚から引留塚の辺りの河原に見事なカワラノギク園を作りましたので、見学させていただきました。“すばらしい”の言葉につきると思います。

「水神会」の皆様本当にご苦労様でした。

※相吉沢さんは、毎日ゆうゆうパーク周辺を散歩しながら、目についたオオキンケイギクやシナダレスズメガヤをこつこつと抜き取っているそうです。また、パーク内の小川のノロ掃除にも取り組んでおられます。目立ちませんが自然体で純粋な活動に頭が下がります。

これまでを振り返って

副会長 田代 英夫

今年度の活動を中心に過年度の分も含めて、私なりに今後の課題等について、いくつかの視点から考えを述べてみたいと思います。

○私たちの会の存在が、関係機関や世間一般にかなり知られるようになった

これは、私たちの地道な活動の様子が、さくら市の広報や新聞等で紹介されたり、腕章を付けて活動している姿が世間の人々の口伝えに広まったためと思われます。

これらのことに加えて、県自然保護功労賞（日本野鳥の会県支部、読売新聞東京本社主催）などの表彰を受けたことも理由の一つになっているものと思われます。

以上のことは、私たちの会にとって喜ばしいことです。その一方でこのことは、目に見えないプレッシャーや重荷となって私たちに返ってくる可能性もあることを意味しています。

